



ようやく会えた  
沙羅双樹の華

長嶺胃腸科内科外科医院  
長嶺 信夫

1. 星砂のような沙羅双樹の華

華はまるで星砂をちりばめたかのように咲いていた。淡く黄色味をおびた白い華である。

夜空にきらめく星の趣でもある (写真1)。インターネットで見る沙羅の華は薄黄緑色をおびた白い華であるがより白い華だ。



写真1. 沙羅双樹の華、草津市立水生植物園「みずの森」にて、2009年4月4日撮影。

中村元博士によると、大パリニッパーナ経の中にブッダ (釈迦) が最後の旅の時、クシナガラで「さあ、アーナンダよ。わたしのために、二本並んだサーラ樹 (沙羅双樹) のあいだに、頭を北に向けて床を用意してくれ。アーナンダよ。わたしは疲れた。横になりたい。」と記載され、また入滅の際の様子として「そのとき沙羅双樹は時ならざるに花咲き、満開となった。それらは如来を供養するために、如来の体に注ぎ、降り注ぎ、散り注いだ。また天のマンダーラヴァ華は虚空から降って、如来を供養するために如来の体に注ぎ、降り注ぎ、散り注いだ。」と記載されているという。言うまでもなく、平家物語の冒頭に登場するあの有名な沙羅双樹の原典の樹である。マンダーラヴァ華は沖縄で見られる真紅のデイゴの華のことで、デイゴはインド原産の樹といわれている。沖縄では4月中

旬から5月にかけて咲き、青空を背景にするとさらに映え、南国にふさわしい華である。

昨年は沙羅の華を見るため1月中旬から大阪伊丹行きの早割りの航空券を買い求め、3月下旬の草津行きの準備をしていた。その年は華が咲く気配はないと聞いていたものの、航空券をキャンセルすることもせず、京都から草津を素通りして東京へとむなしい旅をしたのであった。

今年は待望の開花情報が寄せられていた。

目的地の滋賀県草津市立水生植物園「みずの森」はJR草津駅からタクシーで20分ほどの距離にある。バス路線もあるが、バスは1時間に1本程度しかない。

琵琶湖に隣接した公園はこじんまりとしたもので、その中にある「ロータス館」は良く整備されていた。しかし、ゆっくり見とれているわけにはいかない。予定している東京行きの新幹線に乗るため京都駅に引き返さなければならない。植物園での見学時間はわずか15分である。温室内を小走りして沙羅の樹を探す。小さな温室なのですぐに目的の沙羅の樹を見つけることができた。沙羅の樹はこんな小さな樹によくも花が咲いたものだと思うほどの小さな樹で幹の直径10cmほどの幼木であった (写真2)。インドのクシナガラで見た沙羅の樹は樹高20mはあった。沙羅の樹は大きくなると直径60cm、高さ30mにもなる樹である。



写真2. 「みずの森」の沙羅の樹の前で。

沖縄の南部戦跡にブッダゆかりの「聖なる菩提樹」の分け樹を植樹した後、まぼろしの沙羅双樹を求めて、遠くインドのクシナガラを訪問

したのは2006年10月のことである（沖縄県医師会報2007年4月号「まぼろしの沙羅双樹を探し求めて」）。その頃は日本国内に沙羅の樹があり、また沙羅の華が咲いているとは夢にも思っていなかった。

その後、沖縄県医師会のホームページに掲載された筆者の随筆を見た方から自宅の温室で育てている沙羅双樹や「みずの森」の沙羅の開花情報が寄せられていた。

## 2. 妙心寺・東林院の沙羅双樹（ナツツバキ）

正真正銘の沙羅の樹と異なり、国内の寺院ではツバキ科の「ナツツバキ」を沙羅双樹に見立てて観賞されてきた。京都の妙心寺・東林院の「沙羅双樹・ナツツバキ」が有名で、ナツツバキが開花する6月の梅雨の頃、しばしばメディアに取り上げられている。

2007年6月、ナツツバキを見るため京都の妙心寺・東林院を訪問した。「沙羅の花を愛でる会」と称して期間限定の一般公開である。訪問者が次から次ぎ訪れて大変な賑わいであったが、写真で有名になっていた沙羅（ナツツバキ）の古木はすでに枯れていた。庭には数本の幼木が植えられていて、その樹に花が咲いていた。京都ではほかにも数箇所の寺院で「ナツツバキ」を見かけたのだが、ナツツバキを「沙羅双樹」と称して観光客に紹介していた。シナノキ科の「ボダイジュ」を正真正銘の釈迦成道の樹である「インドボダイジュ」の代わりに紹介しているのと同様に「ナツツバキ」を「沙羅双樹」と称して観光客に紹介している（写真3、4）。フタバガキ科の本物の沙羅の樹は、露地で

育たないので、しかたないことではあるが、十分な説明がないと誤解を招きかねない。



写真4. ツバキ科のナツツバキ。法金剛院にて、2007年6月16日撮影。

## 3. 涅槃にはいった沙羅双樹

2006年10月にクシナガラの涅槃寺の高僧から贈呈された正真正銘のフタバガキ科の沙羅双樹はわが家の庭で新芽を出し、1年間によく育っていたが、鉢土の上にビートモスを撒いた直後から急に樹勢が衰え、あわててビートモスを除去したものの、その後樹勢が回復することなく今年になって枯れてしまった。残念なことに、手元には在りし日の沙羅の苗木の写真が残っているだけである（写真5）。インドより寒い沖縄の気候のせいだと指摘する人もいるが、沙羅の樹は、冬になると沖縄より寒いインド北部やネパールで自生する樹なので冬の寒さが原因とは考えられない。PHなど微妙な土壌の質の差ではないかと考えている。いつの日か、また沖縄の地で沙羅の樹を育てたいものである（2009年4月記す）。



写真3. 京都・法金剛院門前、2007年6月16日撮影。



写真5. 在りし日の沙羅の樹、2007年7月7日撮影